

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 17 日現在

機関番号：11301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820005

研究課題名（和文） パーニニが言及する重複語幹動詞の研究

研究課題名（英文） A study of the reduplicated verbs taught by Pāṇini

研究代表者

尾園 絢一 (OZONO JUNICHI)

東北大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号：90613662

研究成果の概要（和文）：インド最古の文法書『パーニニ文典』の文法規則を適用して導き出される重複語幹動詞，主に意欲活用語幹等を古インドアーリヤ語の古層（ヴェーダ語）の実例と比較し，文法学者パーニニがどのヴェーダ文献にみられる語形・語法を念頭において文法規則を立てたのかを確定した。その結果，パーニニが教える標準的な言語はブラーフマナの言語的特徴と一致することが多く，従って，主にブラーフマナの時代の言語から発展したものであることを強く支持する結果を得た。

研究成果の概要（英文）：The aim of the study is to elucidate the linguistic facts of which Pāṇini's grammar is composed. I compared reduplicated verbs, particularly desiderative verbs, formed by the application of his grammatical rules with forms attested in the Vedic texts. The study demonstrated the linguistic peculiarities of Veda he had in his eye in establishing the grammatical rules on reduplicated verbs. The findings strongly suggest that the standard language taught by Pāṇini is developed chiefly from that of Brāhmaṇa texts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：印度哲学・仏教学

キーワード：パーニニ，ヴェーダ語，動詞，重複語幹，意欲語幹

1. 研究開始当初の背景

ヴェーダ語から古典サンスクリットへの過渡期に位置づけられるパーニニ文法の実態

を解明するためには，パーニニが教える語形とヴェーダの用例とを一つずつ照らし合わせる必要がある。こうした方法による研究と

しては Thieme, *Pāṇini and the Veda* (1935) が知られているが、今日の水準に照らして根本的にやりなおす必要がある。本研究が対象とする、重複語幹動詞はインド・ヨーロッパ祖語にまで遡る重要な形成法であり、ヴェーダには多様な形が在証される。近年 Schaefer, *Das Intensivum im Vedischen* (1994), Kümmel, *Das Perfekt im indoiranischen* (2000) 等によってそれぞれの重複カテゴリーに関する網羅的な研究が行われ、成果を挙げている。とはいえ、例えば文献に見出される、ある語形が重複現在語幹なのか完了語幹なのか、ということ形態、機能、内容に基づいて特定する作業は実際には容易ではない。他方、パーニニは近代ヨーロッパに端を発する歴史文法とは全く異なった動詞組織を前提として規則を立てており、パーニニ文法の動詞組織の具体的説明はひいてはパーニニが構築した「プログラミング」の説明につながる極めて重要な課題である。近年飛躍的な発展を見た古インドアーリヤ語の動詞研究とヴェーダ学、そしてパーニニ文法学、それぞれの分野における研究の蓄積は、この難題に本格的に取り組むことを可能にしつつある。

2. 研究の目的

パーニニの文法規則から導き出される重複語幹動詞の語形を古インドアーリヤ語の古層（ヴェーダ語）の実例と比較し、パーニニがどの文献にみられる語形・語法を念頭において文法規則を立てたのかを確定する。こうした作業を積み重ね、最終的には古インドアーリヤ語の歴史的展開の中に位置づけることを目指す。

ヴェーダ語はリグヴェーダの言語（紀元前 1200 年頃）、アタルヴァヴェーダ等のマントラ（紀元前 1000 年頃）、ヤジュルヴェーダ散文（紀元前 800 年頃）、ブラーフマナ文献の散文（紀元前 7 世紀頃から）、ウパニシャッ

ド（紀元前 6 世紀頃から）や祭式綱要書（スートラ）文献の言語、という時代層に大まかに分けることができる。パーニニが活躍したのは、一般に紀元前年 380 年頃と推定されるが、当時使用されていた言語は相当古い特徴を残していたと推測される。そこで、パーニニが標準的と考える語形・語法をヴェーダの用例と比較しながら明らかにすることによって、『パーニニ文典』を言語史的観点から、これまで以上に正確に位置けることを目指す。成功すれば、同文典の実態解明に大きく貢献し、信頼できる資料としてインド学、言語学等の分野に提供することになる。

3. 研究の方法

本研究は重複語幹動詞の中、主に意欲語幹 (Desiderativ) を中心に研究する。『パーニニ文典』の意欲語幹に関する全規則（約 30）を網羅的に精査した後、パーニニが規定する意欲語幹動詞語形を Vishva Bandhu, *Vedic Word Concordance* (1942-) を用いてヴェーダ文献に同定し、パーニニが実際にどのような、又はどの時代の言語事実を予定して規則を立てたのかを明らかにする。

特にブラーフマナやスートラ等の比較的后代の文献に現れる新しい語幹形成、及びその生産性を考慮しながら、調査を進める。当然、これまでの研究、例えば J. Charpentier, *Die Desiderativbildungen der indoiranischen Sprachen* (1912), Güntert, *Zur Bildung der altindischen Desiderativa* (1912), Heenen, *Le désidératif en védique* (2006) 等を活用しながら、意欲語幹の調査にあたる。

そして意欲語幹等の重複語幹動詞のヴェーダにおける用例がパーニニの個々の陳述と対応するか否かを調査するために、パーニニが意欲語幹形成接辞 *-sa-* (*san*) の下に教える全規則を調査する。その際、関連規則に

対する伝統文法学の解釈を着実に抑えながら、関連規則を正しく適用して意欲語幹を導き出すことに努める。

以上の調査を経た後、パーニニが記述する意欲語幹形成法全体をまとめ、パーニニの陳述を意欲語幹の歴史展開と照合する。

4. 研究成果

2011 年度前半は基礎作業として重複カテゴリーに関する先行研究、問題点を整理した。その過程で得られた成果は、9 月にルーマニアのブカレストで開かれた第 5 回国際ヴェーダ学ワークショップにおいて発表した。ヴェーダに見られる複合完了 (periphrastic perfect) 語形とパーニニの文法規則および後代の文法学者の議論とを照合した。さらにヴェーダ散文において、語りの時制として使用される未完了 (imperfect) と完了 (perfect) に関する言語事実を『パーニニ文典』の規則、及びパタンジャリの注釈書『マハーバーシャ』に見られる議論と比較した。その結果、パーニニが教える標準的な言語はブラーフマナ文献の言語の新層に近いものである可能を指摘した。

2012 年度は、意欲語幹動詞を中心に調査した。本来この語幹は *i* で重複し、語根部分はゼロ階梯になる。本研究では、ヴェーダに見られる意欲語幹動詞を語根部分がゼロ階梯か標準階梯かということと結合母音が語尾の前につくかどうかによって 4 つのタイプに分類し、それらのヴェーダ語における生産性を明らかにした。ヤジュルヴェーダからブラーフマナにかけての期間に多様な意欲語幹が現れるようになったことが明らかになった。さらに上述の 4 タイプの意欲語幹形成法に関連する文法規則を網羅し、それらを適用して導き出される語幹を比較した結果、ブラーフマナ以降の語幹形成法と一致することが多いことが分かった。

また *PaP* (*P* = 破裂音) という構造をもつ語根が意欲語幹を作る場合、異化作用 (dissimilation) が働いた結果、*PiP-sa-*となることが知られており、パーニニもそれらを列挙している。それらのヴェーダの用例を精査し、同時に伝統文法学の見解を跡付けながら、パーニニが念頭に置いた語幹と置いていなかった語幹とを明らかにした。

またパーニニは意欲語幹が語彙化して独立の動詞となったものを幾つか挙げており、それらがブラーフマナからウパニシャッドの時代にかけて語彙化する過程を明らかにした。

以上のことから、パーニニが教える標準語、あるいはパーニニが前提とする動詞組織はブラーフマナ文献の言語に近いということを一層支持する結果を得た。

この成果の主要な部分は 2012 年 12 月に京都で開かれたインド思想史学会において発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① Junichi Ozono “The periphrastic perfect in the Vedic language and Pāṇini’s grammar”
Proceedings of The Fifth International Vedic Workshop. Vedic śākhās: Past, Present and Future (印刷中) 査読無

[学会発表] (計 2 件)

- ① 尾園絢一 「パーニニが記述する Desiderativ 語幹形成について」インド思想史学会 2012 年 12 月 22 日、京都大学楽友会館
- ② 尾園絢一 “The periphrastic perfect in the Vedic language and Pāṇini’s grammar” 第 5 回国

際ヴェーダ学ワークショップ (The Fifth
International Vedic Workshop. Vedic śākhās:
Past, Present and Future), 2011年9月23日,
ルーマニア, ブカレスト

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾園 絢一 (OZONO JUNICHI)
東北大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号 : 90613662

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :